

守
破
創
対談

若くして難関の「ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクール」で日本人として初優勝し、多くの音楽ファンから愛されている辻井伸行氏。ツアーをはじめ、ハードなスケジュールをこなしながら、音楽に対する真摯な姿勢を常に貫いている彼に、ピアニストとして日頃から考えていること、そして、今後の計画や展望など、演奏に懸ける思いを伺った。



日本銀行政策委員会 審議委員

佐藤健裕

Takehiro Sato

1961年大阪府生まれ。1985年京都大学経済学部卒業後、(株)住友銀行入行。1999年モルガン・スタンレー・ジャパン・リミテッド入社。モルガン・スタンレー証券(株)エグゼクティブ・ディレクター日本経済担当チーフエコノミスト、マネージング・ディレクター日本経済担当チーフエコノミスト、経済調査部チーフエコノミスト 兼 債券戦略部長などを歴任し、2012年モルガン・スタンレー MUFJ証券(株)マネージング・ディレクター経済調査部チーフエコノミスト 兼 債券調査本部長。2012年7月より日本銀行政策委員会審議委員。

クラシック音楽の魅力を多くのの人に伝えたい



ピアニスト

辻井伸行

Nobuyuki Tsujii

1988年東京生まれ 幼少期からピアノの才能を発揮し、10歳でオーケストラと共演してデビューを飾る。2007年にCDデビュー。2009年6月に、アメリカのテキサス州フォートワースで開催された「第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクール」で日本人として初めて優勝。以後、日本を代表するピアニストの一人として国際的に活躍している。アシュケナージ、ゲルギエフなど、一流の指揮者たちとも数多く共演。幼少の頃から作曲を始め、近年は映画やドラマのテーマ曲も手がけている。2011年には、自作を収録したディスクをリリースしている。

美しい音色で聴き手を包み込む独特な世界

佐藤 七月にかけてシヨパンとリストによるリサイタル・ツアーを日本各地で行っていらっしやいました。ツアーが終わったばかりと伺いましたが、そのリサイタルでは、リスト(注1)のソナタ(注2)も演奏されておられました。私は、この曲が大好きで、さまざまな演奏を聴いてきましたが、辻井さんが弾くリストのソナタを聴いた記憶がありません。もしかすると初挑戦ですか。

辻井 初挑戦の曲です。

佐藤 やはりそうでしたか。私の独断と偏見では、辻井さんの演奏の特徴は音色にあると思います。音の透明度の高さ、そして、音の美しさは他のピアニストと比較してずば抜けています。曲の解釈については、とても温かいと言いますか、全ての人を包み込んで幸せにしてくれるような独特な世界があると思います。リストのソナタの演奏で、その方向性の世界を出していくのは難しいかと思いました。

注1 / フランツ・リスト
(一八二一〜一八八六) リスト
ガリー生まれのピアニスト、
作曲家。ピアノとして
は、超絶技巧の持ち主として、
その貴公子然とした容貌と
合わせて、欧州中を熱狂させた。
作曲家としては、当初は装飾的
で技巧の目立つ作品が多かつたが、
徐々に内省的な作風に転換。
晩年には、20世紀の現代音楽を予感させる地点にまで達した。

注2 / ピアノ・ソナタ 口短調
一八五二〜五三年作曲。
単一楽章の中に多楽章からなるソナタ形式を盛り込んだ、
演奏時間約30分のリストの代表的ピアノ作品。
演奏技術的に難しいだけでなく、
多彩な感情と超自然的な力が感じられるような表現(デ・モニーツシユ)が求められる難曲。

注3 / 佐渡裕 (一九六一生)
日本の指揮者。兵庫県立芸術文化センター芸術監督シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者を務める。
二〇一五年九月からは、オーストリアを代表する、一〇七年の歴史をもつトーンキュンストラーク管弦楽団音楽監督に就任。

辻井 僕が弾くときにいつも心が

がけていることは、作曲家がどういう音を求めて、どういう気持ちになつて書いたのかを、楽譜から読み取って表現することです。リストという作曲家は、よく知られているショパンと同じ時代の人ながら対照的な存在です。詩情溢れるピアノ曲が作品のほとんどを占めるショパンに対して、リストはピアノ曲だけでなくさまざまなタイプの曲を書いていきます。聴衆を唖然とさせるような超絶技巧系のピアノ作品は、ノリと勢いで弾ききることもできますが、ソナタは、高い演奏技術だけでなくさまざまな要素が盛り込まれた大作であり、体力と集中力が不可欠です。

佐藤 リストのソナタは最初から最後まで緊張感と高揚感にあふれていますよね。

辻井 ソナタは、以前から弾きたいと望んでいた作品でした。しかし、この曲は今まで弾いてきたリストの作品の中でも難しく、リサイクルで披露する水準まで仕上げるのに苦労しました。

佐藤 辻井さんの音色の美しさ

は、音に対する非常に鋭い感覚から来ているのではないかと思っています。僭越な言い方で恐縮ですが、やはり尋常ではない耳だと感じます。ピアノの音は、弾いていても自分の音が聴こえていない人が結構多いと聞きます。ところが、辻井さんの場合は、ご自分が出している音をよく聴かれているなど強く感じます。

辻井 響きを聴きながら演奏するのはとても大切なことですし、自分の出した音を出して、そして楽しんで演奏することが大事だと思っています。美しい弱音を出すのは本当に難しいのですが、そういう音が出せると、自分の演奏にも幅広い表現力がつくといつも思っています。

印象に残った ウィーン・デビュー

佐藤 今年は、五月から三二日間に及ぶ欧米ツアーがあり、いずれも大盛況だったと伺っています。特に印象に残ったことはありますか。

辻井 ウィーンでのデビューを

ウィーン・フィルのニューイヤール・コンサート会場として有名なムジークフェラインザールで、さらに中学生時代からお付き合っていた指揮者の佐渡裕(注3)氏が指揮するトーンキュンストラーク管弦楽団と共演できたことです。まさか、ウィーン・デビューをあの素晴らしいホールでできるとは思っていなかっただけに、うれしかったです。

佐藤 トーンキュンストラーク管弦楽団の演奏を、私もウィーンで昔聞いたことがあります。学生時代の貧乏旅行でお金がなく、ホール後方の安価な立ち見席で聴きました。それでもホールの響きが恐ろしく柔らかくて、包み込むような響きですよね。

辻井 素晴らしいホールです。その一方で、僕は、音楽の本場と言われるウィーンの方たちが、どんな気持ちで演奏を聴いているのだろうと思って演奏していました。そうしたら、終わったら熱い拍手がわき起こったので、本当に驚きました。

国によってそれぞれ 違いがある聴衆の反応

佐藤 聴衆の反応に関しては、ウィーンに限らず、海外の聴衆の方々と国内の聴衆の方々と、何か違いはあるのでしょうか。

辻井 やはり反応は違います。日本の聴衆の方たちは温かく、アメリカの聴衆の方たちは熱狂的で、スタンディングオベーションをして、ブラボーといった歓声が飛び交ったりします。



注4／ヴァン・クライバーン
国際ピアノ・コンクール
一九六二年より四年ごとに
開催される国際的なピアノ・
コンクール。

注5／ヴァン・クライバーン
(一九三四～二〇一三)ア
メリカのピアノリスト。東西
冷戦下の一九五八年、当時
の共産圏の盟主ソビエト連
邦が国家の威信をかけて開
催した第一回チャイコフス
キー国際ピアノ・コンク
ールで並み居るソビエト連邦
のピアノリストを抑えて優勝
し、一躍アメリカの英雄と
なった。

注6／ワレリー・ゲルギエフ
(一九五三生) ロシアの指
揮者。現在、ロシアのサン
クトペテルブルクのマリイ
ンスキー劇場芸術総監督
ロンドン交響楽団首席指揮
者を務めるだけでなく、世
界中のオーケストラや歌劇
場からのオファーが絶えな
い人気指揮者。

注7／ミュンヘン・フィルハー
モニー管弦楽団、ドイツ・
ミュンヘンに一九九三年に
創設のドイツ有数のオーケ
ストラ。二〇一五年九月よ
りゲルギエフが首席指揮者
に就任する。

注8／セルゲイ・ラフマニ
フ(一八七三～一九四三)
ロシアのピアノリスト、作曲
家。並外れた大きな手を持
ち、卓越したピアノリストと
して活躍する傍ら、ロシア
らしい抒情的なメロディイ
と憂鬱に満ちた響きを兼ね
備えた作品を残した。

注9／ピアノ協奏曲第二番二
短調作品番号三〇 後述の
ピアノ協奏曲第二番と並
ぶラフマニフの代表曲。
アメリカへの演奏旅行で
披露するために作曲され

ヨーロッパの聴衆の反応で思い
出すのは、二〇〇九年、ヴァン・
クライバーン国際ピアノ・コン
クール(注4)の優勝後にドイツ
で初めて演奏会をしたときのこ
とです。二〇〇〇席くらいの小さ
なホールでしたが、ドイツのお
客様は、当初、無名に近いピ
アリストが、どんな演奏をするの
か厳しく品定めをするように見
つめているのを感じました。舞
台に出た瞬間、その空気が伝
わってきて、プレッシャーを感
じました。演奏をしていくうち
に、徐々に皆さんが集中して聴
いてくださり、終わってからは
心から拍手をしてくださったの
で、うれしかったです。

佐藤 辻井さんはライブの人と
いうイメージがあつて、お客さ
んの反応がいいとどんどんノリ
にのつてくる感じがします。あ
くまでも私の印象ですけれども
……。

辻井 演奏会は、いつも一回
きりのものですので、お客様
に少しでもいいものを聴いて
いただきたいと思います。
二〇〇九年に受けたコンクール
に名前が冠せられている名ピ

アリストのヴァン・クライバーン
(注5)さんに亡くなる少し前
にお会いしたとき、彼が「クラシッ
ク音楽を生で皆さんに聴いてい
ただいて、少しでもコンサート
に足を運んでもらえるような、
そういうピアノリストになりな
さい」と語ってくれた言葉が胸に
残っており、そうありたいと
常々願っています。

佐藤 三二日間の欧米ツアーと
聞きますと、非常にハードだと
想像します。ツアーをこなすに
は、それなりに体力も必要だと
思いますがいかがでしょうか。

辻井 演奏をする上で健康管理
はすごく大事です。僕の場合は、
時差ぼけがないものですから、
助かっています。

佐藤 それは不思議ですね。

辻井 移動が大変なときもあり
ますが、よく寝て、よく食べて、
よく運動して、大変だと思つた
ことは一度もありません。い
つも楽しんでツアーをしています。

佐藤 ところで、欧米ではクラ
シック音楽が生活の一部になっ
ていると思います。一方、日本
ではクラシック音楽は今でも

やや敷居が高いと思われる
印象があります。こういった日
本におけるクラシック音楽の現
状について、何か感じていらっ
しゃることはありますでしょうか。

辻井 クラシック音楽は敷居が
高いと感じて、コンサートに行
きづらいという方も多いと思
います。僕は、そうした方々に
少しでも演奏会の生の雰囲気
を味わっていただき、クラシッ
ク音楽に興味を抱かれて、「また
コンサートに行きたいな」と
思っていただけのような演奏家
になりたいと思っています。そ
して、クラシック音楽の素晴ら
しい魅力を皆様に伝えて、その
ファンを増やすことができた
らいいなと思っています。

協奏曲は音楽家同士の コミュニケーションが大切

佐藤 今後のご計画ですが、こ
の秋には、巨匠ゲルギエフ(注6)
率いるミュンヘン・フィルハー
モニー(注7)との共演が予定さ
れています。リサイタルで演奏
するときに協奏曲を演奏する
ときは、いろいろと異なる面があ

ると思います。例えば、協奏曲
では、指揮者やオーケストラの
演奏家の方とはタクトではなく
て、呼吸で合わせるというお話
を伺ったことがあります。

辻井 ピアリストは独奏で弾く
機会が多いので、他の楽器とは
違って孤独な感じがあります。
協奏曲の素晴らしいところは、
他の音楽家の皆様や指揮者の方
と力を合わせて、みんなであつ
た音楽をつくっていく点です。
もちろん、オーケストラの音を
聴きながら弾いていますし、言
葉よりも音楽で伝えられること
が多くあるので、音楽家同士で



©Yuji Hori

一九〇九年、ニューヨークにて作曲家自身のピアノで初演される。演奏時間約四十五分。

注10／ピアノ協奏曲第二番ハ短調作品番号一八、ラフマニノフの代表的作品として多くのコンサートで取り上げられる人気作品。演奏時間約三十五分。

注11／ベートーヴェンは生涯に三曲のピアノ・ソナタを作曲した。これらについて一九世紀後半を代表する指揮者ビュローロは「ピアノリストにとっての新約聖書」だと評した(ちなみに「旧約聖書」は、バッハ作曲「平均律クラヴィア曲集」)。「後期のピアノ・ソナタ」とは、第二八番(第三番の五曲を指す。辻井氏は、国際コンクールにて、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ中最大の規模と難易度を誇る第二九番変ロ長調作品番号一〇六「ハンマークラヴィア」を演奏して優勝している。

は自然と、「こうやりたいんだな」とわかり合えるのです。

佐藤 自然にコミュニケーションをとりながら、お互いに音楽を形づくり、だんだんと盛り上げていく協奏曲の醍醐味は、客席にもしっかりと伝わってきます。

辻井 共演そのものも楽しいですし、オーケストラとツアーを重ねると、皆さんと仲よくなり、どんどん一体化してきて、いい演奏ができます。ツアーの最後のほうになると、もう終わってしまうのかという寂しさを感じますし、「またぜひやりたいね」と皆さんがおっしゃってくだ

さったりすると本当にうれしいですね。

難曲であればあるほど 挑戦心が湧いてくる

佐藤 来春再挑戦されるラフマニノフ(注8)のピアノ協奏曲第三番(注9)は私が好きな曲です。長い曲である上に、ピアノのソロ・パートは、全曲を通じてほとんど休みがなく、技術的にも難しい作品であり、辻井さんがしばしば取り上げている同じ作曲家の第二番(注10)以上に並外れた気力、体力が必要なように私には思えます。

辻井 ラフマニノフのピアノ協奏曲第三番は、昔から弾きたかった曲の一つで、昨年初めて取り組みました。いざ始めると、技術的にすごく難しく、今まで取り組んだ協奏曲の中で一番苦労しました。

佐藤 辻井さんの口から「難しい」という言葉が出てくるので、私は少し安心しました(笑)。「難しい」という概念がそもそもないということが、お母様の本に書かれていたので。

辻井 小さい頃は感じませんで

した。しかし、今は曲の難易度も徐々に高くなっています。でも、だからこそ挑戦したいという気持ちがあります。難しくしてハードルが高いほど燃えますし、これを上手に弾いて、皆様が喜んでくださるというイメージが常にあるので頑張ろうという気になります。

佐藤 私は、辻井さんの自作もいろいろと聴いたことがあります。作曲家として、ピアノリストとは違ったご苦労もあると思いますが。

辻井 作曲は小さい頃から好きでした。クラシックの曲を弾くときは、作曲家が求めているものを楽譜から読み取って楽譜どおりに演奏しますが、自分の曲を弾くときは、もっと自由な感じですね。旅行に行ったり、自然の中を散歩し、小川のせせらぎを聴いたり、風を感じたり、小鳥の鳴き声を聴いたりして、感じとったものをイメージして作曲しています。

佐藤 最近では、映画音楽やドラマの曲、テレビ番組のテーマ曲なども手がけていますね。

辻井 その場合は、台本やテ

マに沿う必要がありますし、少し苦労するケースもあります。その一方、完成時には達成感があり、こうした仕事に、作曲を通じて携われてよかったと感じます。

佐藤 辻井さんは、若くして幅広いレパートリーをお持ちですが、今後の計画、例えば、室内楽等との共演も含めて、どのようにお考えですか。

辻井 室内楽に関してはまだ経験が少ないので、もっと取り組みたいと思っています。ソリストとしては、ベートーヴェンの後期のソナタ、さらにはソナタ全曲(注11)もできたらと思っています。もちろん五曲のピアノ協奏曲もすべて取り上げたいです。ベートーヴェンやショパンをはじめピアノ曲はきりがなほほどあります(笑)。若い頃ではないと弾けない曲や、体力が必要な大曲は今のうちにレパートリーとして取り組んでおきたいと思っています。

佐藤 「世界の辻井」として、今後ますますのご活躍、ご発展を、心から期待しています。本日はありがとうございました。

対談 守破創

